

2003年度

北海道民族学会通信

北海道民族学会

〒060-0810 札幌市北区北10条西7丁目

北海道大学大学院文学研究科(文学部)

佐々木亨研究室 気付 tel & fax 011-706-3067

E-mail sasaki@let.hokudai.ac.jp

題 字：椿坂小簾(鮎の会所属)

発行者：岡田淳子

編 集：佐々木亨

北海道民族学会 2003 年度第 1 回研究会発表要旨 (2003 年 6 月 14 日 北海道大学)

『丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌』に含まれるオオウバユリ食用記述とその周辺

若林 和夫(当学会会員)

今回は、前回の採集、保存処理記述の考察に続き食用関連記述に関して考察を行った。

食用記述は、『丁巳日誌』に家屋内のものが十三件ほど存在し、第五巻五丁「ベツバラ」、六巻十七丁「ベ、ツプト(フシコベツ)」、六巻二十九丁「ホロソウ(ベツチウシ)」、六巻三十四丁「ホンメン」、七巻五丁「アサカラ」九巻三十丁「トツク(ハンケホロナイ)」、十一巻四十八丁「トンベツホ」、十二巻七丁「ヲクルマトマナイ」、十二巻三十七丁「チノミ」、十二巻四十九丁「チノミ」、十二巻五十一丁「ナイフト」、十三巻三十三丁「ヲクルマトマナイ」、十三巻三十五丁「ヲニサツヘ」となる。また、野外でのものは八巻三十一丁「クウカルウシ」のみである。

考察については、まず「調理する側」の把握と男女差、「料理」については「馳走される側」と「馳走する側」の身分の把握と両者に関連があるかどうかを考察し、料理自体に上下があるかを見た。さらに、「調理方法の差異」についても、若干ながら考察し、特に「ヲニサツヘ」については、儀式との関連についても言及を行った。

では、一点一点について、要点を述べる。

「調理する側」については、夫婦を持っていて、婦人のみ或は双方が健在な世帯と、成人に近い女性がいる場合では、女性が調理を行う。それ以外の例、つまり、夫のみが健在な世帯或は、幼女を持つ男性中心の世帯と、旅行中の野宿(男性のみで構成されている)では、男性が調理を行っている。

このうち、「アサカラ」のトクヒタ脇乙名タウサリの世帯では、脇乙名の夫人とその娘が亡くなっており、脇乙名の娘の子であるシヤウシンテが女性であるものの、十歳と幼い。そこで、脇乙名の粹であるニホウンテが調理をしている。

「料理」については、引き続き考察の余地はあるものの、武四郎や同行の乙名層が来たからといって、非日常的なものを出すかというところでもない。基本的に、「煮る」「焼く」「餅にする」といった調理法に大別できるが、「ヲクルマトマナイ」では、調理を思い立ったのは武四郎で、トレフを入れようと申し出たのはアイヌという多少複雑な例もある。

さらに、各料理に価値の上下があるかについては、「ヲニサツヘ」での熊送りにトレフ餅を使用していることが参考となる。つまり、儀式については一定の差が存在することが伺える。「ヲニサツヘ」の儀式的記述からは、周辺の老人も加わって準備を行い、トレフ餅についてはトキノチの妻と粹が作る様子が描かれており、既にこの時期農耕の比較的浸透している日高地方とは、違った様子である。もちろん、この例は、他の例が存在せず、比較検討ができないので、安易に絶対化することはできない。

最後に、「煮る」調理法に差が見られた事について書いておくと、「煮る」といっても、それ単独と考えられるものや、「アサカラ」のように黒百合と食土を混合した料理を出しており、オオウバユリは入っていないものの、似たような料理を『廻浦日記』の時に食べた他の個所で記しており、それがどうやら樺太でのことで、今回の記述が天塩一名寄間のものであることが興味深い。

以上、前回と今回で、オオウバユリに関しては、有効なものに関して一応全ての記述を見、考察を行った。口頭発表ということもあり、資料紹介と基礎的な情報の整理しか提供できていないが、一応のところ、足掛け二年半に及ぶ今回の研究で、どのようなことが分ったかを簡単ながらまとめておく。

オオウバユリに関して、採集、処理、調理への男女

の関わりを考えると、基本的に、三点ともに女性が主役の作業である。その一方で、病や老年、幼児を抱えている等の理由から家内にいる男性が三つの作業をこなすこともある。これは日常のみでなく、儀式などの調理にもいえる。この点は、近代資料での認識や武四郎などの指摘により理解されることだが、それをはっきりと確認できた意味は大きい。

逆に、当初意識しなかった結果として、全体の日時を見る限りでは、利用についてもオオウバユリが採集可能な時期に記述が集中しており、冬の記述はないということがわかった。これは、全体の食用例等との関係や「もてなし」を考える上で、今後課題となる点である。

さらに、安政期にもオオウバユリに関して、採集の

記述と松浦武四郎の見識と「トレフ餅」の存在から、一定の保存処理が行われ、保存後に何らかの方法で粉を得るか、保存前に粉を得ていると推察されることが確認できたことも、大きい。

なお、この研究は、松浦家、秋葉実氏の並々ならぬ努力を欠いては、一筆を起すことさえままならなかった。初めの知見も最後の結論も、両者と北海道出版企画センターのおかげで得る事ができたのである。また研究の機会を与えてくださった北大北方資料室をはじめとする各機関、そして浪人中の時間の自由さと私に発表の機会を与えてくださった北海道民族学会とに感謝しつつ、安政期のオオウバユリ利用に関する一連の発表要旨の末尾とする。

北海道民族学会 2003 年度第 1 回研究会発表要旨

(2003 年 6 月 14 日 北海道大学)

シベリア諸民族の通過儀礼に関する文化人類学的研究

木村 美希 (北海道大学大学院文学研究科博士課程 1 年)

この研究はロシアシベリア地域諸民族の通過儀礼の内容とその変化を明らかにすることを目的としている。これまで西シベリア地域諸民族(ハンティ、マンシ、ネネツ、エネツ、セリクープ、ガナサン、ケット)および極東アムール川流域諸民族(ナナイ、ウリチ、オロチ、ウデヘ、ニプフ)の結婚および死者に関する儀礼の具体的な内容を民族誌資料から抽出し、分析を行なった。今回はこれまでの文献調査から明らかになった特徴と、今後の課題について報告する。

いかなる社会でも行われる通過儀礼は人の生活に直接関わるため、属している社会や環境の変化の影響を受けやすい。一方で周囲の変化に関わらず、儀礼の内容を維持する面も持っている。通過儀礼の内容の変化と維持の様子はシベリア地域諸民族の共通点と相違点を明らかにする一つの視点となると考えられる。シベリア地域諸民族に関する研究は継続的な民族調査を行いながら進められてきたが、特にソビエト時代、非社会主義国に対して閉鎖的であったため、その成果が十分に活用されてきたとは言いがたい。また現地の実際の様子より、民族誌の中ではないわゆる「伝統的な」諸民族の姿を描き続けたという問題点もある。これらの資料の特徴をふまえ、現在にいたるまでのシベリア地域諸民族の通過儀礼の内容とその変化を研究する必要があるのである。

まず西シベリア地域諸民族の結婚儀礼ではかなり整った求婚儀礼が実行されてきた。若者の結婚の希望を受けて、交渉を行う仲人を選び、まず花嫁側に贈物を渡して、求婚に賛成なら婚資額を決める交渉を始めるという流れが共通している。仲人は父親や叔父、兄弟、その他の親戚や知人から選ばれ杖を持っ

た。贈物は鍋に入れて渡し、花嫁の両親がそれを受け取ると求婚に同意したことになった。結婚式が花嫁側での宴会、移動、花婿側での宴会という流れで行われることは共通しているが、ケットだけは異なり、シャマンによる儀礼が行われた後、花婿は花嫁の家に、花嫁は花婿の家に連れて行かれて別々に宴会をした。

一方極東アムール川流域地域諸民族では、母親の兄弟の娘との結婚を望む傾向が共通していた。母親が姪を引き取って、将来の夫婦と一緒に養育された。この場合結婚式などの儀礼は行なわれなかった。この地域では花嫁が実家を出るときと夫の家に入るときに、敷居の両側に置いた鍋を踏む儀礼が行なわれた。鍋は幸福や豊かさのシンボルであり、それを交換した。それぞれの家での宴会は婚資を払った場合に行なわれた。

西シベリア地域諸民族ではあの世が北つまり川の下流にあるという考えが広く見られた。ケットは太陽が沈む西にあるとも考え、これは極東地域と共通している。副葬品を故意に壊すことは、この地域だけでなくシベリア全体に見られるものである。遺体が家の中にある間明かりを消さず食事を供えること、墓地で焚火を燃やし食事をすること、トナカイの犠牲を捧げることも共通している。家から遺体を出すときに入口を使わない、葬式から帰るときに枝で道を遮る、違う道を通るなど普段と違うことをして死者の魂が戻ってこないようにした。ガナサン以外は一族の墓地を持った。子供を成人とは異なり、例えば木の上に葬ることは、西シベリア地域だけでなく極東アムール地域にも共通している。ここでは極東

地域のように決まったサイクルで供養儀礼を行なわなかった。

極東アムール地域諸民族では棺または特別な小屋に遺体を入れて置くという葬法が共通して見られた。ニブフだけは火葬を行なうが、葬法以外は共通している点が多い。この地域ではあの世は西にあり、地上と変わらない生活だが、季節や昼夜が逆だと考えていた。遺体が家の中にある間は明かりを消さない、家が倒れないように紐で縛る、家族が死者に繋がった糸の端を持ち、それを老人が断ち切る儀礼は共通して見られた。食料や物を焚火に投げ入れて死者に渡すことは西シベリア地域とも共通している。死者の魂が入った人形を家で保管し、定期的に供養式を行い、数年後シャマンが魂をあの世に連れて行く大供養式を行なうという一定の供養儀礼のサイクルが

見られた。この地域では溺死者は水の住人と、クマに殺された人はタイガの住人と関係があり、双子はその両方と関係があると考え、特別な葬法と供養儀礼を行い狩猟や漁撈の成功を祈願した。

西シベリア地域と極東アムール地域の結婚と死者に関する儀礼についての民族誌資料から、地域内では民族の違いを超えて大局的な儀礼の構造が共通していることがわかった。また両地域に共通している部分があることもわかった。これまで利用したデータは主に19世紀末-20世紀中頃までのものである。その後現在にいたるまで変化し続ける状況の中で、彼らの人生に直接関わる通過儀礼の内容にはどのような変化や維持が起きているのか、今後聞き取りや観察などのフィールドワークを通じて調査する必要がある。

北海道民族学会 2003 年度第 1 回研究会発表要旨

(2003 年 6 月 14 日 北海道大学)

パキスタン陸軍士官学校にみる象徴的権力

西尾 ふみ (北海道大学大学院文学研究科博士課程 3 年)

本発表では、パキスタン士官学校 (PMA) について、英領インドの伝統を継承した空間創造が行われてきた状況と、そこに含まれた新しい意図について述べた。筆者は 2001 年 1 月から 2002 年 12 月にかけて通算 1 年半の間パキスタンに滞在し、2002 年 9 月には 3 日間にわたって士官学校を見学する機会を得た。

現在のパキスタンの軍隊は、もとは英領インド軍の一部である。国家が独立する時点で既に成熟した巨大組織となっていたために、国づくりの全ての面において、軍隊—なかでも陸軍—が大きな役割を果たしてきた。陸軍社会は、現代パキスタンを特色づけてきたひとつの要因といってもよいにも関わらず、これまであまり着目されてこなかったといえよう。

パキスタン士官学校は、陸軍士官が必ず一度は属さなくてはならない場所である。この学校は、ヒマラヤの小都市カクルに 1948 年に設立された。設立にあたってモデルとなったのはインド士官学校 (IMA) であるが、それにはさらに前例があり、そのインド士官学校とはイギリスの王立士官学校を忠実にインドで再現しようとしたものである。パキスタン士官学校はそれゆえ、インド士官学校を経由して、イギリス王立士官学校に縁を持つものと考えられている。このルーツの意識は、代々受け継がれた標語・ルール・儀礼などによって折に触れて想起されるが、ここでは特に「空間」に着目してみた。

そもそもカクルは英国人が開発した避暑地であっただけに、気候は冷涼で雨が多く、平地とは全く対

照的である。気候風土だけでなく、その敷地内の空間のいたるところに、英領インド士官の伝統を思い起こさせる仕掛けが用意されている。そのひとつの方法は、植民地時代に作られたものをそのまま保存することで、例えば英国人が住んでいたバンガローは別の用途に転用しながら大事に保存されている。また、新しい建築物を古い様式にそっくり倣って作り出すことには特別な価値がおかれている。士官用メス (食堂ホール)、ボロ競技場、パレード場などもインド士官学校を忠実に模倣したものであるし、松の木を毎年植樹して増やしてゆくことも重要と考えられている。

このような空間作りは、英領インドにおいては帝国権力の象徴としてはたらいと考えられている。モデルとなったインド士官学校の場合、十九世紀的な、優生学的な空間観念の影響を受けた様子がうかがえる。問題は、現在パキスタンにおいて、この「英国風」空間を正当化する言説が以前とは異なったものになったということである。今日では、パキスタン陸軍の外でも内でも、優生学的思想は批判の的になっている。元々の意味を失った模倣的空間が作られつづけるということをどう解釈したらよいのかという問題が浮上するだろう。

過去の優生学的人種概念が批判される文脈には、複雑な民族と政治の問題がある。過去の英領インドでは、傭兵の選抜と組織化を出身地名とクランによって管理しており、特定の諸クランに属するものを「戦闘種族」と定め、その優先採用を制度化した。

しかし、分離独立して「パキスタン」が誕生した後、このようなナショナリズムにそぐわない言説は否定され、新しい陸軍はクランや母語による差別をしないという姿勢を強くアピールしている。そのうえ、「イスラーム教徒のための国」という建国の思想により陸軍の統一をはかっているわけでもない。イスラームに関する教育活動は最低限に抑えられ、分派間の亀裂を生まないよう配慮されている。敷地内のモスクはアザーン（礼拝の呼びかけ）を行わないという、非常に珍しいものである。

そのような状況下で、現在の士官学校の卒業者たちは、士官学校の空間が「英領インド的」であることについて、「どんな民族的・宗教的背景を持つものに

対しても等しく異質である」という意味で利点と感じている。そこでの二年間の共同生活で、「陸軍士官」という強いアイデンティティを持ったグループが生み出されるのであるから、日常とは隔絶された空間を保つことが要請されているのである。そして、そのような空間へのアクセスの制限が、権力性を高めている側面もある。

この状況は、植民地時代の遺産のように見える空間が、かつての意味を失いつつも、模倣という生産的な営みによって新たな価値を生み出している今日的な例のひとつといえるだろう。タウシクの「ミメシス」の概念は、そのような模倣のあり方をとらえるひとつの有用な方法を示していると思われる。

北海道民族学会 2003 年度第 1 回研究会発表要旨

(2003 年 6 月 14 日 北海道大学)

伝統的日本食を再興すべきである—ファーストフードよりスローフードへ—

林 義夫 (林義夫産科婦人科医院)

日本近代が明治初期以来、前代の文明の滅亡の上に立ち立てられた事実を鋭く認識していたのは、むしろ同時代（江戸末期ペルー来航以来ハリスらとともに来朝した多くの外人報道者達）の異邦人達であった。（逝きし世の面影：渡辺 京二）

彼らが描き出す古き日本の形姿は実に新鮮で美しく、礼儀正しく、素晴らしく質素で、清潔で、しかもどんな労働でも楽しく笑みを浮かべながら働きこなす、素晴らしい人種であり、子供達も皆、はつらつとして明るく、仲良く、豊かな心情の集団で自然美とよく一致していた、と記述されている。

そして、識者は又語るのである。明治、大正、昭和、平成と日本の現代に至る近代の生活様式の変化は、なんであろうか。特に近年に至っての経済至上主義による効率性と利便性、とめどなく進む情報化と流通性、科学・医療の進展とうらはらに、種々の不安、不満、不信、価値観の変化による少子高齢化社会の中での信仰的にまで、健康志向がうずまいている。しかしながら日本民族文化そのものの、変化は私は日常生活の基本となる食文化の大きな変化から、従来日本では乳癌発生や血栓症の発生は少ないという文化人類学的特長は変化しつつあり、又約 10 年来、代謝疾患の高率化は市民の高齢化率の向上とともに、従来脳卒中型より心梗塞型の高率化（とくに基本となる動脈硬化の若年化）があることであり、その大きな原因は食文化の変化と車社会の普及による運動不足の出現にあると考えており、今にしてそれら生活習慣病の予防取り組みに生活様式の改変を 1 日も

早く取り組むべきものとして草の根運動としての手造り日本食の復興を私達は、茲 3 年来運動してきているが、ここに更めて強く主張するものである。それは私達の小規模スタディながら 500 人余のファーストフードについてのアンケート調査から手造り食の衰退が明確とされており、それは現在 1000 余例に至っても変わっていない。それも中高齢者の約 30% に手造り日本食の減少がみられていることである。その理由は、核家族化や食の孤食化、物流性、生活上の多忙性、食膳準備の共働き主婦のストレス等々、種々の要因があり、かつ時代の進展とともに食養も変化するのは当然とする容認派が大多数と考えるが、近年問題視されてきた牛 BSE や、鶏インフルエンザにみる如く食材の大きな問題性や不健康性も問題とされなければならない。又食養は、16km 四方の旬のものの地産地消が基本（身土不二）であることから、従来日本民族の健康維持増進を担ってきた伝統的手造り日本食のよさを見直し、食材の産地や食質のもつ不分明な調理調整ずみのファーストフードは、加えてそのもののもつ高脂肪・高糖質・高塩分さらに、この調理・調整に至るファーストフード食品の不分明な部分が多くあることであり、更めて食育教育を進めるべくその認識が肝要と考え 2、3 の資料につき、考案したものである。日本人には医療文化人類学的に、縄文以来多年に亘る民族としての特殊性があり、それは治療文化人類学に通じるものといえる。私達は、伝統日本食を捨て去ってはならない。（文献省略）

【資料】

ファストフード化の背景（20～30才台（学生・サラリーマン）単身者の場合）

1. 調理の時間がない 2. 節食（偏食）の理由（♀、美容上限りないやせ願望）

3. 経済上①（独居老人、二世帯住宅、配食受給者 etc）（数量的に無駄を省く）

②孤食化している社会家庭環境

③日本社会のライフスタイルの変化

1) 利便性の追求 2) 経済上の効率性の追求

3) テレビ文化、農村都市生活化、均一性化、外国行事食(クリスマス、バレンタイン等)の隆盛化

4) 農林食文化→一律都市食風俗化 5) ファストフード店の普及

6) 外食産業の普及 7) 伝統行事食の変化・衰退・消滅

8) 手軽な保存食、簡便食の普及(カップ食)

9) 共働き(主婦)の夕食の手造り準備へのストレス(つつい外食かファストフード購入へ走る)

北海道民族学会 2003 年度第 1 回研究会発表要旨 (2003 年 6 月 14 日 北海道大学)

アイヌ衣文化の変遷から伝世品を考える

津田 命子（北海道立アイヌ総合センター）

研究目的は、アイヌであり製作者である筆者が自らの衣文化を調査することと、異文化接触による変化を材料や技術の比較でみた。過去に注目されなかった分野に注視しながら、出處の記録を伴わない伝世品を考えた。

内容は資料調査を行い一覧表の作成をした。調査数 92 点は、「在外アイヌ関係資料にもとづくアイヌ文化の再構築」(2001、小谷凱宣編、南山大学人類学研究所発行)、「東京国立博物館図版目録・アイヌ資料編」(1992、東京国立博物館編、発行)と「アイヌ資料編 2」(1988、北海道ウタリ協会編)による国内外資料衣服総数の約 13 パーセントにあたる。収集博物館名、収蔵番号、収集地、収集者、材料、仕立糸、技術などの項目を設定して行い、①図表を作成し数量化した。アイヌ絵を描いた絵師活動期の年代順と、資料収集年の年代順を並立させた表を作成しつつ、②実測図を作成してきた。アイヌ絵に見られる背面文様と資料の背面文様を比較検討するために、③模式図を作成し分類した。

①から、1) 資料の材質による比較、2) 仕立糸別の利用頻度の比較、3) 布の縫合技法比較、4) モレウ（渦巻文様）の出現頻度を作成した。

1) と 2) から、アイヌ衣服とその仕立糸の材料は、近世、近代から現代にかけて鞣皮から木綿に、それぞれ置き換えられたことがわかる。3) から、アイヌの伝統的な固い素材に適した縫合技法が徐々に消失して、和裁の技術が浸透したことがわかる。4) から、モレウ文様は年代の古い資料群ほど少なく、年代の新しい資料群に多いこと、また、鞣皮衣のモレウは長方形の木綿の置布の上に刺繍で表現されたモノが多く、木綿衣のモレウはテーブ状の木綿置布そのものが曲げて置かれモレウとなり、その中程に刺

繍が施されてあることが多い。このことから異文化接触によってもたらされた柔軟で加工容易な木綿布がモレウの誕生に大きく関わっていると考えられる。

②から、筆者はアイヌの文様構成に約 1/2 という原則が存在することを証明した。置布の約 1/2 に刺繍を施すことから、文様構成全体にわたって、半分に折って目印をつけるという方法をくり返すことで、複雑な文様を作り上げていることがわかった。この原則の存在が忘れられたため、現在のアイヌ刺繍作家は、伝統文様から下絵をおこし布に転写するという、三上マリ子氏の導入した方式によってアイヌ文様を作成している。

③から、アイヌ文様構成が変化してきたことがわかった。模式図は、刺繍が確認できない群と、多くの置布が独立して構成されている「独立置布型（仮）」群、多くの置布が連結されている「連結置布型（仮）」群、「折衷型（仮）」におおまかながら分類できた。「独立置布型（仮）」と「連結置布型（仮）」は近世に並立しており、近世から近代に移行するあたりで木綿の影響を大きく受け、「独立置布型（仮）」の文様構成方法の技法の上に「連結置布型（仮）」が重なった「折衷型（仮）」を生み出したのではないかと推察する。

以上をふまえて「旭川市博物館所蔵目録 X」(1999)の「河野コレクション」群、No5020 を熟覧した。名称が「樹皮衣」。寸法は横、97.5cm、縦 71.5cm。備考に「樹皮衣の腰から下の部分」とある。筆者は三幅の前垂れと判断した。一見、樹皮衣の腰から下という様相を呈しているが、衣服の腰から下部分であれば必ず前身頃二幅、後身頃二幅、合計四幅となるからである。東京国立博物館秘蔵「蝦夷島奇観」(1982、佐々木利和、谷澤尚一研究解説)に描かれている横向き立姿の和人女性が身に付けている前垂れ

と類似している。

この伝世品はオビヨウ靱皮布同士をオビヨウ靱皮糸で縫合(かがり縫い)し、木綿の置布はイラクサ靱皮糸で縫合(かがり縫い)してある。伝統の技を身につけた作り手によるもので、和裁(波縫い)が一般化していない時代の作と思われる。刺繍の芯糸や押え糸の全部が靱皮糸であることから、木綿糸の流通が希少で入手が困難な時期に製作されたと推測される。筆者の作成した模式図に照合すると、「置布独立型

(仮)」群に分類され、木村謙次靱皮衣資料(1799年)、フォンブランド靱皮衣資料(1868年)の文様構成と非常に良く似ているといえる。1)、2)、3)、4)と模式図のどの方向から見ても、この伝世品の製作された時期は、近世から近代初頭あたりという可能性はある。以上のことから、使用材料、使用技術、文様構成の原則を突き詰める作業と模式図製作作業を継続することで、記録のない伝世品に、おおまかな製作の時代を想定することが可能と思う。

北海道民族学会 2003 年度第 3 回研究会発表要旨 (2004 年 1 月 31 日 北海道大学)

移民としてのスコルトサーミとそのエスニック・アイデンティティ

三上欧介(北海道大学大学院文学研究科博士課程 1 年)

本稿では北欧の先住民として広く知られるサーミの中でも、ロシアのコラ半島を起源として独特の伝統文化をもち、現在は主にフィンランドに移住しているスコルトサーミに着目する。理論的な枠組みとしては、移民についての研究の流れや、サーミの文化復興運動などに関するこれまでの議論を踏まえた上で、「移民(広い意味での「移動」)」と「エスニシティ」という 2 つのテーマを関連づけた人類学的研究を行なうことを目的とする。

現在のサーミの人口について一般的には、ノルウェーに 3 万人、スウェーデンに 1 万 7 千人、フィンランドに 6 千人、ロシアのコラ半島に 2 千人、全体で 5 万～7 万人とされている。またサーミと呼ばれる人々の中にも、その用いる言語などにおいて、下部構造として 9 つほどの分類がなされている。もっとも多いのは北サーミで、全体の 7 割以上を占める。フィンランドにおいては北サーミが北部を中心に 4 千～5 千人、他にイナリサーミが数百人と、今回中心に取り上げるスコルトサーミが数百人住んでいる。そのうち、有名なトナカイ飼育に携わっているのは 1 割程度にすぎない。他にも伝統的な生業としては鮭などの漁労や採集がある。しかし現在ではサービス業に従事している人が多い。なお、「サーミ」あるいは「スコルトサーミ」は、フィンもふくめて通婚が進んでいる事実もあり、「閉鎖系的」な「少数民族」として規定することは決して適切でない。

記録に残るものとしては 17、18 世紀頃には、スコルトサーミは Suenjel のような地域に居住しており、この地域は辺境であるため、防衛の目的などでツァーリによる保護がなされていたといわれる。1917 年にフィンランドはロシア革命の混乱に乗じて独立を果たした。1920 年には Petsamo District (Suenjel を含む) がロシア領からフィンランド領になった。しかし彼らが行なうトナカイ飼育は放牧のためかなりのスペースを必要とし、とくに冬季地

区はソ連領に含まれていた。そのためフィンランドが冬季居留地・学校を建設し、スコルトを受け入れることとなった。

フィンランドはソ連との冬戦争に敗れ、第 2 次大戦後 Petsamo District は再びソ連に割譲されることとなった。したがって Suenjel などのスコルトサーミがフィンランドに取り残される形となり、1949 年、Sevettijärvi に新しく居留地が建設され、現在でもフィンランドにおいては、この Sevettijärvi がスコルトサーミの伝統地域とみなされている。

特に 20 世紀に入って、サーミ全体として伝統的な衣装、生活様式などがすたれ、以前は結婚式で見られた光景もなくなっていった。これには政府が彼らを国民として規定しようとし、学校教育の言語からサーミ語を排除したことや、それとともに膾炙したサーミに対する差別意識などの影響があった。このことはスコルトサーミに関しても同様であった。1960 年代にはいわゆる "Snowmobile Revolution" が起こり、トナカイ飼育の方法が画期的に変化した。最近ではスノーモービルはもちろんのこと、携帯電話、GPS、一部ではヘリコプターを使ってトナカイを管理するようになり、便利になったことは間違いないが、古くからの伝統的な方法が失われたという言説も強い。加えて、チェルノブイリに代表される環境破壊のもたらす、トナカイや人間への影響が問題となって、近年ではサーミの側から「持続可能な開発」を求める動きが強まっている。

第 2 次大戦後、サーミの民族意識が急速に高まり、1950 年代にノルウェー、スウェーデン、フィンランドに次々とサーミの組織ができるなどした。こうした政治的な運動においては、サーミはあくまで一枚岩としての民族として、差別の撤廃などの主張を展開していた。そういった状況でスコルトサーミは、たとえば宗教の面で、フィンランドではサーミも含めてルーテリアンが一般的だが、ロシア正教会への信

仰を保つなどの独自性を保持していた。1970年代にカウトケイノ＝アルタダム問題がおこった。これはノルウェーでサーミの居住地域にダムを建設する話が持ち上がり、サーミが反発してセンセーションとなったもので、結果としてサーミの“Ethnic Rights”の要求の機運が盛り上がった。特にサーミの言語を取り戻そうとする流れの中で、スコルトサーミ語の新聞“Saamoddaž”の創刊、新聞学校でのスコルトサーミ語の教育、ラジオ放送といったことも、比較的小規模ではあるが行なわれた。

このように、スコルトサーミは“minority of minorities”といえるような立場にあった。トナカイ飼育に関しても、放牧地が重なることがあって、トナカイ管理のためのフェンスを設置しようとする場合などに他のサーミとトラブルになることもあった。また、スコルトサーミの伝統的なハンディクラフトや衣装などを復活させようという動きが起こった際には、他のサーミからの借用もあり、典型的な文化の接触・混交が見られた。マジョリティという他者としてのフィン、他者であるがしばしば同一視される北サーミ、イナリサーミと現実的に接触することにより、スコルトサーミは新たに自己規定を迫られることとなり、以前とはやや異なる「フィンランドにおけるスコルトサーミ」としての自己構築がなされた。スコルトサーミは他の民族との通婚なども多いことから消え行く民族として見られることもある。しかし彼らはそれぞれの生活の中で、フィンランド人としてのアイデンティティ、サーミとしてのアイデンティティ、そしてスコルトサーミとしてのアイデンティティを重層的に維持・再生産している。

Sevettijärviやイナリ湖周辺のような地域にとどまらず、ヘルシンキやロヴァニエミのような都市部でも同様であって、たとえば都市部においてサーミの団体も存在し、自分の意思で参加している人が多くいる。彼らは状況に応じて自身のエスニシティを発動させ、あるいはさせない判断をしているといえる。1970年代以降のサーミのエスニック・アイデンティティの復興運動は、とりわけ先住民族としての土地権・水利権といった部分での法的整備を政治的に要求することと、消え行く言語の教育を中心としたものであったが、最近は若い世代を中心に、そうした経緯をふまえてサーミとしての生き方を新たに模索する動きもある。

今回取り上げたスコルトサーミの移住は、基本的に国家間の問題に巻き込まれたことをきっかけにしたものである。従来の移民関係の議論は、個人主義

的（個人決定的）な方向に偏る部分もあったが、この事例に関しては多少異なった様相を呈している。

一般的にフィンランド人は長い支配の歴史のためにロシアが嫌いだといわれており、したがってロシアに起源を持つスコルトサーミもどこか嫌われているという言説もある。私が現地で出会ったスコルトサーミの中にも一部、そういったことを漏らす人がいた。このことはただちに民族的な差別につながるほど深刻なことであるかどうかは判然としなかったが、移動によって自身の社会的立場も変わることにより、個人のエスニシティの変化や、エスニックグループの構造自体の変化が必然的に起きる。またトナカイ飼育の際の問題にもあったように、物理的な面でのトラブルも起こりやすい。そうした局面にあたって、人々はエスニシティを状況を見ながらつくりかえたり、前述のように再び自己構築したりする。また「移住や定住の際に互いに助けるために、移民自身が発達させたインフォーマルなネットワーク（カースルズ／ミラー 1996:24）」は世界中で見られている。エスニックグループは中でも中心的な役割を占めるものである。フィンランド国内における移動（特に北部の伝統的地域から都市へ）についても、これに関連した議論ができると考えられる。

【文献】

- 伊藤谷登士翁 2001 『グローバリゼーションと移民』 有信堂
 関根政美 2000 『多文化主義社会の到来』 朝日選書650 朝日新聞社
 竹田いさみ 1991 『移民・難民・援助の政治学』 勁草書房
 長坂格 2001 「故郷で養育される移住者の子供達—フィリピンからイタリアへの移住における家族ネットワーク—」『民族学研究』66-1 日本民族学会
 エンツェンスベルガー、H.M. 1993 『国際大移動』 野村修訳品文社
 カースルズ、S./ミラー、M.J. 1996 『国際移民の時代』 関根政美／関根薫訳 名古屋大学出版会
 Pelto, J. Pertti 1978 Skolt Sami Ethnicity and Cultural Revival Ethnos 1978:3-4 / 1979 Politics and Ethnic identity among the Skolt Sami in Finland ETUDES 1979 vol.3 No.2
 Ingold, Tim 1976 The Skolt Lapps Today Cambridge University Press
 Lumisalmi, Erkki 1996 The Skolt Saami Culture From History to Present Irja Seurujärvi-Kari & Ulla-Maija Kulonen (eds.) Essays on Indigenous and Rights Helsinki University Press
 Sarv, Marju 1996 Changes in the Social Life of the Kola Saami Irja Seurujärvi-Kari & Ulla-Maija Kulonen (eds.) Essays on Indigenous and Rights Helsinki University Press
 三上欧介 平成14年度北海道大学文学研究科修士論文「フィンランドにおけるサーミのアーバン・エスニシティ」

【おことわり】 2003年11月15日に北海道大学において第2回研究会が開催されましたが、日本民族学会北海道地区の熊本理事（当時）の意向により、本通信に発表要旨を掲載しないことになりました。なお、発表者・発表題目は以下のとおりです。山口未花子「北海道における捕鯨文化」、雲井梅「フフホト市におけるトゥメト・モンゴル人の民族的アイデンティティ」、和田大樹「豊頃町・池田町における体験型観光の開発」、熊本孝「紛争と紛争解決の人類学—プロローグ」

中国における共食の意義

小坂 みゆき (元北京師範大学研究生)

人と人が共に食事するという機会が減り、コミュニケーション不足と言われる現代社会において、共食がどのような意味を持ち、また持ち得るのか。中国における共食を 1 つの例にして考察してみた。

中国では、人間関係を作る場としての「共食」が重視され、これを活かそうとする姿勢が強く感じられる。食事の場では、人と人が楽しく食事をするということに最も重点が置かれ、食べきれない食べ物と飲みきれない飲物が用意される。ホストは食材や調理法、身体にどのような効用があるかを話し、話しの合間に食べ物をすすめて、楽しい話で場を盛り上げる。最終的にはホストがいかに素晴らしいもてなしができたかが、今後の人間関係に発展していくという印象を受ける。

このような意識や作法が生まれた背景には、中国古代からの自然界の力を説いた陰陽思想や五行思想、道教、儒教の影響が大きい。この 3 つはどれも食に強い関心を示し、食についての教えが経典や教本などに残されており、今日も尚健在である。

陰陽思想は、全ての万物は気によって成り立っており、それらがバランスを保つことにより、正常な動きができると考える。食べ物も季節にあったものを食べることによって健康が維持され、季節の動きに逆らうと病気になると考えられている。

道教では、「不老長寿」が教義の根本となっており、陰陽説と同じく健康維持するために注意が払われる。

儒教は道徳を説き、道徳で人間の秩序を守ろうと考えていた。その中でも「仁」「礼」が重視され、孔子は「食礼」で食に関する作法を事細かに決めている。「仁」とは上下の関係で、仕事上では君臣関係、主従関係や先輩後輩においては忠義や尊敬、家族においては親子の関係の中で親愛・尊敬、男女で言えば夫婦の関係の中で、下の者は上の者を、女性は男性を敬い、祖先を崇拝するというものであった。この「礼」「仁」が、宴会の中での作法を作り、それが今日の中国の宴会にも浸透し、反映しているのである。

中国では、人と共に食べるということに対し、積極的な一面と消極的な一面と両方がともなっているように思われる。親族だけが集まったの宴会では内輪の団結を深め、対外的な宴会では情報を収集しコミュニケーションを深め、新しい知人を作ろうと努力する。そのどちらの宴会においても「礼」を重視し

た作法によって積極的に行われるが、その内面には、身を守るための作法という要素も含まれている。ここには、長い封建制度の中で自分の身を守るのは自分でしかなく、そのためにも、敵をつくらず、逆に何かあった時に助けてもらえる人間関係を確保しておこうという要素があるように思われる。その潤滑油として共食が利用されているのは、陰陽説、道教、儒教の影響から、中国人が「健康であること」と「食べる」ということに強い関心を持っていること、共食が人間にとって、仲間意識を強めるのに、非常に効果的であるということが意識されているからではないだろうか。

中国では、また、儒教の影響と思われるが、人と一緒に食事するとき、自分と相手との関係や、はっきりとした目的意識を持ち、どのように食べるか、誰と食べるか、何を食べるかということが重視される。このため、もてなす側とされる側がはっきりしており、割り勘という発想が生まれづらい。また、日本と中国で共同事業を始める時など、食事の席で打ち解けたが、後日商談になると、楽しく食事し酒を飲んだ関係が嘘のように中国側に有利な要求をされ、日本人は面食らうことがある。民族が違えば「共食」とらえ方は同じではなく、日本人は食べることで仲間意識ができたと考え、スムーズに話しを進めやすくなると考える。ところが、中国人はもてなすことで貸しを作ったと考えるので、交渉の場で自分の側が有利に運べると考えるのである。

今日の共食を築いたこれらの思想は今後も引き継がれていくと思われるが、一方、以前よりも割り勘が増え、共食の場所、家族での共食の様相やそれに費やされる時間の減少など、共食のありかたにも変化が見られる。しかし、儒教、道教、陰陽思想、五行思想が基本となった「食」および「共食」への考え方の基本は簡単には変わらないと思われる。現在の中国は目に見える部分での変化が著しいので、日本の経済高度成長期と同じ道をたどることも考えられ、今後の動きは予想しにくい。しかし、国際化と経済の発展をめざす現在の中国は、長い歴史の中で築き上げた思想や知識や知恵を活かしながら、人と一緒に食べることに積極的で、食を通して仲間意識を強めようとする考え方や姿勢は変わることなく、それを糧としていく方向に進むのではないかと考えられる。